

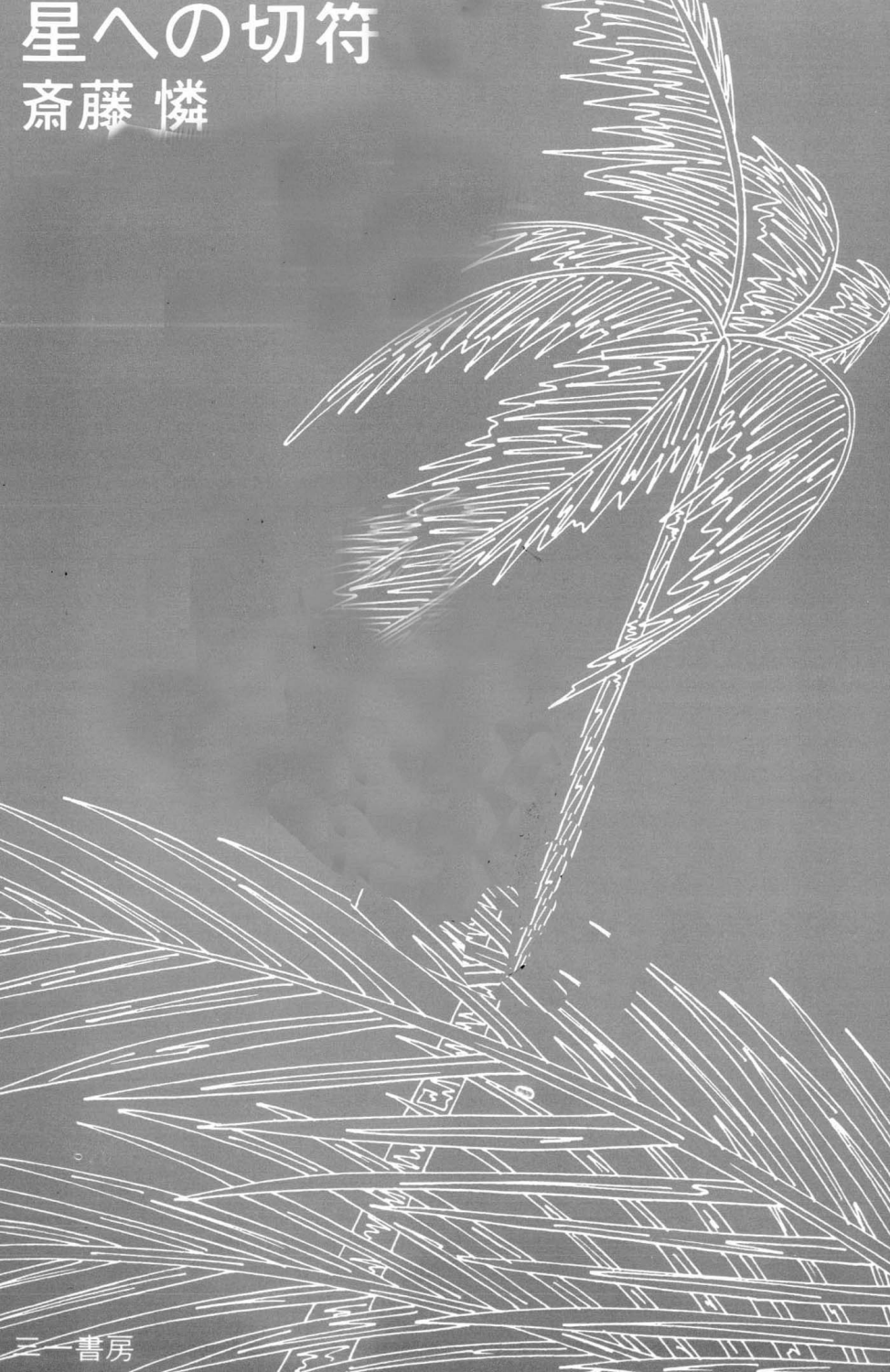
星への切符

斎藤 憐



星への切符

斎藤 憐



斎藤 憐（さいとう れん）

1940年朝鮮平壤に生まれる

早稲田大学文学部中退，俳優座養成所卒業

1980年「上海バンスキング」にて第24回岸田国土戯曲賞を受賞

著書 斎藤憐戯曲集

『赤目』

『世直し作五郎伝』

『黄昏のボードビル』

『上海バンスキング』

『パーレスク1931』（以上，而立書房）

星への切符

Printed in Japan

1982年 6 月 30 日 第1版第1刷発行

著 者 斎 藤 憐

©1982年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 誠 和 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株 式 会 社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

星への切符* 目次

五つの銅貨 * はじめての銅貨 7

汚れた銅貨 14

銅貨の願い 20

変った銅貨 27

銅貨効果 34

時ノ計リゴト * タイム・ギヤング法 43

時が愛を運び行く 53

時計の贈るレクイエム 59

冥土の時計 64

時計とともに 71

五人伝吉 * 初代伝吉伝 81

二代目伝吉伝 87

三代目伝吉伝 96

四代目伝吉伝

105

五代目伝吉伝

114

賈作御伽噺 * みにくい白鳥の子

127

三年寝太郎の永眠

134

捕りこしクロウの青い鳥

142

不思議の街のアキ

152

大航海時代

161

星への切符 * 二十一世紀ユートピア計画

177

波

191

チヨコレート

199

ラジオのなくなる日

205

星への切符

221

* あとがき

233

装釘・イラスト
小島 武

五つの銅貨

はじめての銅貨

今でこそ、銅貨と言やあ、十円だの一ペニーだの一セントだのと、餓鬼がきの小遣にも足りねえもんだが、漢かんの時代、今から二千年以上前の大陸じゃ、そりゃ、たいしたもんじゃったそうなの。今では、コインマニア憧れの、昭和二十六年製十円玉は、その晩、私がふるまった焼酎しょうちゅうのせいもあって、その高価な銅貨にまつわる物語りを、喋り出したのです。

「おっ母、死なんで」

もう七つになったんだから、泣いちゃいかんとチャンは自分に言いきかせたけれど、妹へイヤーの手を握りながら、おっ母は土みてえな色になっちゃった。石みてえに冷たくなったおっ母は、チャンの涙を、もうふいてもくれない。

お百姓の家に生れたチャンは、毎朝、お陽^{ひかり}さんが出る前に起きだして、お父^{ちち}とお母と、真暗になるまで働いたけれど、チャンが五つの時、ブチの牛は市場に連れて行かれちまって、それからお母は無理をしすぎたんだ。野良^{のり}から帰って、土間へつつぶしたなり、しばらく動こうともしねえお母の背中を、妹のヘイヤーが小さな手でさすってやったもんだ。

お母の死を悲しんで暮らすなんてことも、貧しい親子にはできねえことで、お母を丘のしいの木の下に埋めると、チャン親子は、その日のうちに、野良へ河から水を運ぶ仕事をはじめた。

チャンが十一になった年に、日照りの夏がやってきて、年貢^{ねんぐ}の払えなくなったチャンのお父は、毎晩じっと星を見とったそう。なんでも年貢のかた^{かた}に、最後に残った石コロだらけの畑が地主に持って行かれるんだと。

お父が町へ行って、帰りに餅を買って来た。

「こんな、うめえもんが……」

九つになるヘイヤーは、餅を口へ入れたまま、ボロボロ涙が出て来て止まらなかった。チャンは、こんなに喜ぶのだったら、毎日ヘイヤーに餅を食わしてやりたいと、その夜、寝るとき考えとった。

つぎの朝、チャンが起きると、隣で寝とるはずのヘイヤーの姿は、お父と一緒に見えなかった。ヘイヤーは、なんでも遠い町のお大尽だうじんの家に行って、幸せに暮らしとるんじゃないと。小さな畑がもどって、チャンはお父と働きながら、やっぱりチャンのお父は偉ええいと考えた。というのも、近所のヨカエの一家は、畑をとられて赤ん坊を抱いたまま、河へ飛び込んだんだから。

お父が死んだ。

チャンが十三になった年じゃった。それでチャンは住みなれた掘立小屋を出て、町の鍛冶屋の世話になった。鍛冶屋の仕事は、野良仕事より、うんとつれえとはじめは思ってたけれど、冬が終る頃にはだんだんチャンも慣れて来た。

夜、チャンが、遠くの町で幸せに住んどるヘイヤーの話をすると、チャンの兄貴あにき分たちは腹をかかえて笑った。兄貴たちが言うには、ヘイヤーはチャンより、もつとつれえ思いをしとるんじゃないと。

「そんなら、俺はヘイヤーを連れもどしに行ってくる」と言うてやったら、それには、チャンが一生働いても貯められんほどのお金がいるんだと。

ある日、チャンは、以前に職人頭をしていたというじいさんから面白え話を聞いた。なんでも、この町からずっと西の方に、どえらい坊さんがおって、その坊さんが、金ちゆうもんを作る術を知つとると言うんじゃ。にぎりこぶしぐらいの金があつたら、チャンはヘイヤーと一緒に暮らせるんじやと。

チャンがつぎの日には、栗餅を袋につめて、西へ向つたのは、もちろんのことじゃった。

そらあ、つれえ苦しい旅だったということじゃ。チャンは一つの町へ着くと、荷運びやら力仕事をして、つぎの町までの食い物をためて、また西へ向つて旅立つた。馬に乗り、船のあらくれどもに使われ、ねぎ坊主のような建物のある町や、チャンとは違った顔立ちをしとる人たちが住んでる町へ、金を作る術を知つとる偉い坊さんを訪ねて行つたそうじゃ。偉い坊さんや、金を作る術を調べとる学者さまに、ぎょうさん会うたそうじゃが、金を作る術を会得したもんには、とうとう会えんかった。

長え長え旅の後、黄色い色の河まで帰りついた時、チャンはもう三十を過ぎとつたそうじゃが、やっぱり泣いてしもうたそうな。金を作る術は会得できんかったが、チャンは、その頃の中国の者が誰も知らん鑄物の技術を身につけとつたんじや。

河原の小屋でチャンが作った鋤^{すく}や鎌^{かま}は、どれも丈夫で使いやすいという評判になったそうじゃ。チャンの評判は口から口へつたわって、遠くの村や町から、やれ藏^{くら}の鍵^{かぎ}を作ってくれの、嫁に持たせる鏡を作れの大変な忙しじゃったそうな。

ある日、そのチャンの小屋に、偉え役人が馬で乗りつけて、言いよる。

「皇帝さまが、お前に頼みがある」

チャンは、忙しいと断ったが、願いを聞いてくれんかったら挺子^{ていこ}でも動かんとがんばりよる。そこで、チャンもあきらめて、こちらからも条件を出したそうな。

言うとおりの仕事をするかわりに、お上^{かみ}はお上の力で、今はもうどこにいるか分らんヘイヤーという女子を捜し出さねばならんと。

約束ができて、チャンはお上のさしむけた牛車に乗って、遠く都まで出かけて行った。チャンが着いた晩、役人は魚やら鳥やら、チャンが今まで食べたこともないようなごちそうをしてから、チャンに一枚の絵を見せて、これを作ってくれと言ったそうな。それは、丸の真中に真四角の穴のあいている薄べったい変なもんじゃった。それには、なんやら変な模様が四つ書いてあった。

「こんなもん、わしに頼まんと、作れるものはいくらでもおるじゃろ」とチャンは言うたが、役人は「いいんじゃ、いいんじゃ、礼はたっぷりする。これと同じ物を星の数ほど作ってくれ」

と言ったそうな。

で、翌日から、チャンは役人の集めた二百人の鍛冶屋を使って仕事にかかった。蔵の鍵や細工物を作ったチャンには、造作もない仕事で、絵のとりの鑄型いたがたを沢山作って、そこにドロドロにとかした銅を流し込んだ。

仕事をはじめて、一年も過ぎた頃、チャンは役人に呼ばれた。チャンは、やっとヘイヤーが見つかったのかと、食べかけの井どんぶりとはしをほおり出して駆け出したと。

長い長い廊下の先の大きな部屋に、美しい着物を着た女が、チャンを待った。チャンは、皆が見とるのもかまわず「ヘイヤー」と叫んで、女の前へ駆け寄った。

娘は、そらあ美しい娘だったが、ヘイヤーとは、似ても似つかん娘じゃった。

「これは、ヘイヤーじゃない。やい、俺はだまされんぞ」

役人は、静かに口を開いた。お前の捜しとるヘイヤーという娘は、お大尽の家に売られて四年目に死んでしもうた。いくら捜しても見つからんわけじゃ。そこで、お前にはヘイヤーより美しい娘を与えよと皇帝さまが申された。ありがたいと思えよ。

「駄目だめだ、駄目だ。どんな娘もヘイヤーのかわりにはならん」

そう叫ぶとチャンは、御殿ごてんから駆け出し、仲間を連れて遠い山の中へ入ってしまった、それ

からチャンの姿を見たもんは、一人もないということじゃ。

つぎの年から、漢の国では五銖銅貨が使われはじめたんじゃ。丸の中に四角の穴があいとる五銖銅貨で、人たちは着物を買ったり、食べものを手に入れたりしたんじゃ。

貧しい家の者が朝起きてみると、家の前に五銖銅貨が置いてあるようになったんは、それからしばらく後のことじゃった。それで、チャンとチャンの仲間たちが生きとる間、その地方では、その高価な銅貨のおかげで、年貢が払えんで娘を売る家はなかったそうじゃ。だから、チャンとその仲間たちが、世界で最初の贋金造りということになるんじゃ。……ね、旦那、焼酎もう一杯もらおうか……

汚れた銅貨

「健一！ なにしてるの！ お金は、バイキンだらけなんだから、口に入れたら死んじゃうよ！」

「死んじゃう」という母さんの言葉に、少年は、あわてて十銭銅貨から手をはなした。「お金はね、どんな人がさわったか分らないでしょ。早く手を洗つといい」

少年は、昼間なのにうす暗いお勝手に行つて、手をゴシゴシ洗つた。指の先からバイキンがどんどんしみこんで来るような気がした。

隣のカズキちゃんが、四つのお誕生日を前に、梅の実を食べてエキリという恐い病氣になつて死んだ。カズキちゃんの写真の前ひなあらは、次の日になつても、その次の日も、減らなかつた。